

「久しぶり。まあそこに座つてよ。ちょうど紅茶が淹れ終わつたばかりだから」  
私は幼馴染の隆一が住むマンションを訪れていた。隆一とは三年ほど会っていなかったが、今日は大切な話があったのだ。

「それで話つて何だった？」

「えつと……実は結婚することになつて」

三年前から付き合っていた彼氏にプロポーズされ、結婚することになったのだ。だからこれまで以上に隆一と二人で会うのは難しくなる。今日はその話をしにきたのだ。

「ああ、それなら母さんから聞いたよ」

隆一があつさり言う。幼馴染で、母親同士も親しいので情報がわりと筒抜けなのだ。

「それにしても結婚か。まさかそんな相手がいるなんて思いもしなかったよ」

隆一が軽口を叩く。私は唇を尖らせた。

「どういう意味よ」

「いや、君が魅力がないってことじゃなくてね？ 小さい頃から一緒にいるとなかなか想像できないことつてあるじゃない。それに最近会えてなかったし」

「それは……」

彼氏ができたので、幼馴染とはいえ二人で会うのはためらわれたのだ。けれどそれを隆一にはなぜか内緒にしてみましたのだ。

「まあそうだよな。彼氏がいるのに幼馴染の男と遊んでたら駄目だもんね。でも何も言ってくれなかったからちよつと寂しかったよ」

「ごめん……」

隆一は自分の紅茶を飲んでから微笑む。昔と変わらない優しい笑顔だ。

「それに離れたところに住んでいたから仕方ないよ。それよりもほら、早く飲まないと紅茶が冷めちゃうよ。せっかく特別な紅茶を用意したんだから」

私は隆一に促されるまま紅茶を口にした。花のような香りが広がる。私は思わずおいしい……と声を漏らしていた。

「おいしい？ それはよかった。最近手に入れた特別なものを使ってるんだよ」  
「そうなんだ」

隆一が紅茶にこだわっているなんて知らなかった。でも三年も会わずにいたら色々変わることもあるだろう。

紅茶を飲んでからしばらくして、私は自分の体が熱くなっていることに気が付いた。顔のあたりで手で風を送っていると隆一が言う。

「何だか暑そうだね？ 顔が赤いよ？」

「あ……うん」

「この部屋暑いかな？」

「そういうことじゃなくて……」

何故かはわからないが、気温とは違う熱が体を包んでいた。それは体の中から湧き出してくるようだ。部屋の中のわずかな風の流れが肌を撫でるだけで体が反応しそうになってしまう。

「何？　そういうことじゃない？　じゃあ何かな……」

隆一はそう言つて、私の隣に腰を下ろす。そして私の耳元でこう尋ねた。

「——体が疼いて、すごく熱いとか？」

耳元で囁かれ、体の芯が熱くなる。私は戸惑いながら隆一を見つめた。

「どうしてわかるのって？　だって特別なものをその紅茶に入れたからね」

隆一が笑う。私はその意味がわからなくて隆一を見つめ返した。

「その紅茶の中に入れたんだよ。——特別な、媚薬をね」

「び、媚薬……？」

「そう。君のために手に入れたんだよ。オレンジっていう媚薬だね。即効性があつ

て、神経が焼けるほど気持ち良くなれて、それから離れることができなくなる」

隆一が私の髪の毛を指に巻き付けてキスをする。私はゾクリとして彼から離れようとした。しかし体が動かない。

「逃げようとしたって無駄だよ。もう体もうまく動かなくなってるはずだよ」

「ど、どうして……」

「どうしてこんなことするのかって？ 君が僕を差し置いて、ポツと出の男なんかと結婚するって言い出すからだよ」

うまく動かない体をソファーに押し倒される。隆一に触られるたびに体がびくびくと反応するようになっていた。隆一は私の手を紐で縛りながら言う。

「小さい頃に約束したじゃないか。僕たちは未来永劫結ばれて、ずっと一緒にいるって。子供の約束だと思ってた？ 僕は本気だったのに。ずっとずっと、君のことばかり考えていたのに」

「隆一……」

「こうなるくらいなら最初から君を閉じ込めておけばよかったな。」

君が夢があるとか言って家を出て、一人暮らしをして。僕はそれをずっと応援してたのに、夢の方は中途半端で、男を捕まえて幸せになろうとしてるなんて許せないよ」

隆一の目は本気だった。静かで、けれど狂気と熱を宿して私を見下ろしている。

「――だからこれは罰なんだよ」

隆一は私の口を開かせると、オレンジ色の錠剤を放り込んで飲み込ませた。すでに熱くなった体に薬が追加され、さらに敏感になる。

しかしこれはほんの序章に過ぎなかったのだ。

「大分媚薬が効いてきたみたいだね。顔がもう蕩けてる」

そう言つて、隆一は私の耳にふーっと息を吹きかける。媚薬が効いた私の体にはそれはもはや劇薬だ。

「ふふ、息を吹きかけたただけなのにビクツとなつたね。可愛い」

息がかかる距離で隆一は話す。可愛いという言葉に背中がゾクゾクしてしまった。  
「ねえ、君の婚約者は君のこんな可愛い姿を知ってるの？ まあ知らないわけないよね。今どき婚前交渉はしないなんてカップル、あんまり見ないし」

「そ、それは……」

確かにそういう関係はあつた。しかし婚約者はわりと淡泊な方で、あつさり終わることが多かった。

「彼氏とはどういうことしてたの？ 教えてよ」

私は顔を横に向けた。答える義務はない。しかし隆一はそれが気に入らなかつたのか、こう言つた。

「教えてくれないなら体に聞くね」

隆一は私の耳を軽く噛んだ。それだけでびくりと腰が浮いてしまう。

「また腰が浮いた。耳を甘噛みされたことはある？」

「な、ないけど……」

「へえ、ないんだ。じゃあこれは？」

隆一はじゆる……♡じゆる……♡と音を立てながら私の耳を舐め始めた。その水音と熱い舌の感触が体に響く。私は体をよじつてそれから逃げようとした。

「だーめ、そんなに逃げたら。ほら……体もビクビクつてしてる……こうやって耳舐められると気持ちいいね……♡」

隆一が陶醉したような声で言い、じゆる……じゅぷつ……と音をさせながら耳を舐め続ける。耳の軟骨を甘噛みし、耳の形を確かめるように舌が動いた。

「君は耳の形だつてこんなにかわいいんだね……♡それに耳以外には何もしてないのに腰も揺れちゃつて」

そう言いながら隆一がまた私の耳を舐める。そして反対の耳は指で責められた。触れるか触れないかの距離で撫でたり、上下に撫でたりしながら時折軽く引つ張つてくる。その緩急がもどかしい快感となつて私を襲つた。

「あはっ♡耳真っ赤になつたね♡じゃあ次は……」

隆一は舌を尖らせて耳の穴の中に入れた。そして中で舌を巧みに動かす。

「あはっ♡耳の穴の中も可愛いね♡……あれ？もしかして、イっちゃつた？」

私は体をビクビクと痙攣させた。隆一はそんな私の耳をまた責め始める。今度はさつきより激しく、ぐちゅぐちゅと音を立てながら。

「あはっ♡耳だけでこんなになるなんて、本当にえっちだね♡」

隆一は耳から口を離してそう言った。私はもう何も考えられないほど蕩けきっていた。しかし、まだ終わりではない。隆一はまた私の耳を舐め始める。

「あはっ♡本当に可愛い……このまま食べちゃいたいな……」

隆一はその後も私の耳を丹念に舐め続けた。媚薬のせいか体が敏感になっていて、それだけで達してしまう。しかし私が絶頂しても隆一は私を解放してくれなかった。

「はあ……はあ……」

やっと解放された頃には息も絶え絶えで、まともに声を出せなかった。そんな私を見ながら隆一は言う。

「ふふ、こんなになって可哀想に」

そんな同情の言葉とは裏腹に、隆一は私の耳を指で撫でる。それだけで私の体はピクンと跳ねた。

「でも媚薬を盛ったのは僕だしね。とことん可愛がつてあげないと」

そう言ってまた隆一は私の耳を舐め始める。

「あはっ♡またビクビクってなったね♡可愛いな♡」

隆一は耳を舐めるだけでなく、私の耳に指を入れて弄り始めた。背中に電流が走ったようになって、動けなくなってしまう。



「ふふ……♡本当に可愛い……もつといじめてあげる……♡」

私はもう何も考えられず、ただ快樂に身を任せるしかなかった。

耳を散々いじめられた私はもう限界だった。全身が敏感になりすぎて少し触れられただけで達してしまふ。そんな状態で、私は隆一に胸を触られていた。

「乳首ビンビンだね……♡」

隆一は私の胸を揉みながら耳元で囁く。その声にさえも反応してしまい、私は小さく喘いだ。すると隆一はクスツと笑って乳首に触れた。

「あぁっ……♡」

「可愛い声……♡もつと聞かせてよ♡」

隆一は私の胸を優しく愛撫し続けた。その手つきは優しくて心地よいのだが、達するには少し物足りない。

「んん……っ……ふう……っ」

「あはっ♡もどかしそうな声してるね……♡もつと激しくしてほしい？」

隆一の言葉にコクリと首を縦に振る。すると彼はニヤリと笑った。

「じゃあ……こうしてあげる……♡」

隆一は両方の手で私の胸を掴んだ。そしてそのまま強く揉みしだく。私は思わず

声を上げてしまった。そんな私を見て隆一は満足そうな表情をする。

「あはっ♡やっぱりこうされるのが好きなんだね……♡」

隆一は私の胸を執拗に攻め立てる。時には強く握り締められたり、指先でピンツと弾かれたりもした。その度に私はビクビクと体を震わせてしまう。

「ふふ……♡君の胸、柔らかくて最高だよ♡」

そう言いながら隆一は私の胸を揉み続ける。彼の手の中で私の乳房は形を変え、快感に打ち震える。

「乳首が勃ってきたね……♡こんなに大きくなってるよ……♡」

隆一は私の胸を揉みしだく手を止め、乳首を摘んでクリクリと刺激した。突然の強い快感に私は身体を仰け反らせる。そんな様子を見て隆一は嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「本当にえっちだね……♡こんなに敏感なのかな？ それとも媚薬のせいかい？」

私は答えられなかった。ただ与えられる快樂に身悶えることしかできない。そんな私を見て隆一はクスツと笑った。

「まあいいや……どっちでも、君が気持ちよくって何も考えられなくなればいいんだ」

そう言って隆一は乳首を口に含んだ。そして舌で転がしたり吸ったりする。

「ひゃうっ……♡あんっ……♡」

「可愛い声……もっともっと聞かせてよ♡」

隆一は執拗に乳首への愛撫を続けた。その間も彼の手は止まらずに胸を揉んでいる。私は何度も身体を跳ねさせながら甘い声を上げ続けた。

「あはっ♡こんなに感じてくれて嬉しいな……♡じゃあ次はこっちね」

隆一は私の胸を揉むのをやめると、反対側の乳首を口に含んでしゃぶり始めた。先程までとは違う快感が全身を襲う。

「んっ……♡ああっ……♡」

「あはっ♡可愛い声……♡もっと聞かせてよ……♡」

そう言いながら隆一は舌先で私の乳首を転がしたり甘噛みしたりする。その度に私は身体を震わせて声を漏らしてしまう。そんな私を見て隆一は満足そうな笑みを浮かべていた。

「あはっ♡腰ビクビクしてるね♡」

彼はそのまま私の乳首を口の中で弄ぶ。そして空いている方の乳首は指先で摘んで捻るような動作をした。私はその強い刺激に身体を仰け反らせる。そんな私の姿を見て隆一はクスリと笑った。

「えっちな声……♡」

隆一は私の胸を弄びながら耳元で囁いた。その声にさえも反応してしまい、私は小さく喘いでしまう。そんな私を見て隆一はさらに笑みを深めた。

「もっといじめてあげる……♡」

そう言つて彼は私の胸への愛撫を再開した。今度は両方の乳首を同時に攻められる。

「あぁっ……♡やぁっ……♡」

隆一は私の胸を弄り続ける。そして時折耳に息を吹きかけてくる。その度に私は身体をビクビクと震わせて反応してしまう。そんな私を見て隆一はクスリと笑つた。

「本当に可愛いね……♡もっといじめてなくなっちゃう……♡」

そう言いながら隆一は私の乳首を口に含んだ。そして舌で転がしたり吸ったりする。私はまた身体を仰け反らせながら甘い声を上げ続けた。

「じゃあそろそろこっちがどうなってるか見てみようか」

隆一の手が下に伸びていく。そして彼は私の脚を開かせるとそのまま下着の中に手を入れてきた。私のそこは既に十分すぎるほど濡れていて、隆一の指先が触れた瞬間に腰が跳ねてしまう。

「あはっ♡すごいね……もうこんなになってるよ……♡」

そう言いながら隆一は私の秘所を弄り始めた。彼の細い指先が入り口付近をなぞるように動くたびに私は甘い声を上げてしまう。そんな私の姿を見て隆一はクスリと笑った。

「あはっ♡本当に可愛いな……♡」

そう言いながら隆一は私の秘所をいじり続ける。時折膣内に指を入れて出し入れしたりもする。その度に私は腰を浮かせながら甘い声を上げ続けた。

「ああっ……♡やあっ……♡」

「可愛い声……♡もっと聞かせてよ……♡」

隆一は執拗に私の秘所を攻め立てる。そんな彼の手淫によって私は何度も達してしまう。しかし隆一は攻めをやめてくれない。

「ああっ……♡やあっ……♡」

隆一は執拗に私の秘所を弄ぶ。そして時折クリトリスを摘んで潰すように刺激す

る。

「あああつ……♡やめてっ……♡」

「ううん、やめてあげないよ♡」

彼の細い指先でクリトリスを強く摘まれたり引つ張られたりする度に私は身体を跳ねさせて甘い声を上げた。そんな私を見て隆一は満足そうな笑みを浮かべている。

「あはっ♡えっちなだね……♡」

そう言つて彼は私の下着を下ろした。下着と私の体の間をつなぐ透明な糸を見て隆一はくすりと笑う。

「もうぐしよぐしよだね♡舐めて綺麗にしてあげる♡」

隆一はそう言ふと私の脚をぐいと広げ、秘所を舐め始めた。舌を使って割れ目を上下に往復するように舐められると私は身体を仰け反らせてしまう。

「ああっ……♡やあっ……♡」

「あはっ♡可愛い声だね……♡もつと聞かせてよ……♡」

隆一は私の秘部を舐め回す。そして時折膣内に舌を挿入して中を掻き回すように動かした。その度に私は身体をビクビクと震わせながら喘ぎ声を漏らしてしまう。

「あはっ♡すごいな……♡」

彼はそう言つて私のクリトリスにも吸い付いた。そしてそのまま舌先で転がした

り甘噛みしたりする。

「ああっ……♡やあっ……♡」

「また溢れてきちゃったね♡」

何度も秘部を舌が往復する。私は何度も絶頂し、息も絶え絶えの状態だった。

「もう……無理……」

「大丈夫だよ。この媚薬は発狂するまでイケるらしいからね♡心配なら追加してあげようね」

隆一はオレンジ色のクリームを指に塗る。私がそれを見つめていると、隆一はくすりと笑った。

「オレンジには色々あるんだよ。飲むやつもあるし、塗るやつも。でもどれもすごく効くんだって」

隆一はそう言うのと私の膣に指を挿入し、媚薬入りのクリームを擦り込むように動かす。彼の指が動く度に私は腰を跳ねさせて喘いだ。

「あああっ……♡やあっ……♡」

「ほら、こことかどう？」

隆一は膣内のある一点を集中的に攻め立てる。その部分に触れる度に私の体は痙攣するように震えた。

「あああっ♡そこっ……ダメえ……♡」

「ここがいいんだね♡」

隆一はさらに激しく攻め立てる。その度に私は身体を大きく震わせた。

「ああっ♡イクっ……！♡」

絶頂に達すると同時に私は潮を噴き出した。隆一はそれを気にせず責め続ける。

「やあっ……♡いったからあ……♡もう……許してえっ……♡」

しかしそれでも隆一は手を止めなかった。さらに強い力でクリトリスを摘んで引っ張るように刺激してくる。その瞬間、目の前が真っ白になるほどの快感に襲われた。絶頂を迎えたのだと理解するのに数秒かかったほどだっただろう。だがその間も隆一は私の膣内を刺激し続けた。その状態で何度も絶頂を迎えるうちに、次第に意識が朦朧としてきた。そんな私を見て隆一は笑う。

「あはっ♡またイッたね♡」

隆一はそう言いながら私の膣内から指を引き抜いた。その刺激にすら反応してしまふほど敏感になっていく私の体は、ビクビクと痙攣している。そんな私を見ながら彼は言った。

「も……もう……やめて……」

私はもう限界だった。空気が動く度に体が跳ねる。私を取り巻く何もかもが毒に



感じるほどに私は敏感になっていた。

「そんなこと言いながらずつと腰振ってるじゃん♡もつと欲しいんでしょ？」

隆一はそう言つて私のクリトリスを爪で弾くように刺激してきた。その瞬間、私は大きな声を出して背中を反らせる。そんな私を見て彼はくすりと笑つた。そしてまた執拗に同じ場所を攻め立ててくる。何度も何度も絶頂を迎えているうちに、ついに意識を保つことすら困難になってきた。もう何も考えられないくらいの快楽に思考がドロドロに溶かされていき、何も考えられなくなるくらいに頭がぼーつとずるようになってきた頃、隆一はやつと手を止めてくれた。

「あれ？ もう限界かな？」

私は何も言えずにただ荒い呼吸を繰り返している。そんな私を見て隆一は満足そうに微笑むと、下着を脱ぎ捨てて私に跨ってきた。そしてそのままゆつくりと挿入していく。

「あぁっ……♡」

私の膣内が彼の肉棒で押し広げられる。その瞬間、私はまた軽く達してしまった。そんな私を見て隆一はクスリと笑う。

「まだ入れただけなんだけどなぁ♡」

そう言いながら彼はゆつくりと腰を動かしてきた。それだけでも私には十分すぎ

るほどの快楽だった。子宮口を押し上げるように強く突き上げられると目の前が真っ白になるほどの快感に襲われてしまう。次第に動きが激しくなり、肌同士がぶつかり合う音が響くようになる頃には、もう完全に理性を失っていた。

「君のここ、僕のにすぐ絡みついてきてるよ……♡」

そう言いながら彼はさらに奥まで突き入れて、ぐりぐりと押し潰すようにして動かしてきた。その刺激に私は体を震わせながら絶頂に達した。しかし隆一はそんなことを気にする様子もなく挿挿を続ける。もう何度絶頂したかなんて覚えていないくらいにイキ狂っていた。そして再び限界を迎えそうになった時、突然彼が動きを止めた。どうして？ という疑問が頭をよぎるよりも先に、膣内で彼のものが痙攣するのを感じた。その瞬間私の中は彼の熱いもので満たされたのだった。